

ICTを活用した心理支援システムの整備

— ICFの観点から自己モニタリングが苦手な思春期の子どものためのプログラムを考える —

佐藤 ^{あきこ}昌子・増淵 裕子・鎌田 せりあ・田中 奈緒子

Providing psychological support for adolescents with defects in self-monitoring by using tablet terminals

Akiko SATO, Yuko MASUBUCHI, Seria KAMATA and Naoko TANAKA

The Institute of Psychological Studies of Showa Women's University has developed a psychological support program for adolescent children with developmental disabilities that utilize tablet terminals. Psychological support has been improved by introducing tablet terminals, by making it easier for counselors and clients to share topics, which has enabled lengthy conversations. Visualizing their experiences in the form of mental mapping by using tablet terminals has enabled clients to monitor their experiences, such as the systematic, multifaceted, and objective monitoring of experiences involving negative emotions. The application of tablet terminals could supplement cognitive processes including self-monitoring in adolescent children with disabilities, which is known to be deficient in such children. Therefore, the use of tablet terminals can be considered as one form of reasonable accommodation that can be made in the process of providing psychological support. It is suggested that tablet computers could be one option for changing environmental factors.

Key words : adolescent (思春期), developmental disabilities (発達障害), tablet terminal (タブレット端末)
psychological support (心理支援), self-monitoring (自己モニタリング)

問題と目的

昭和女子大学(以下、本学)生活心理研究所(以下、当研究所)は、本学大学院生活機構研究科の附属機関であり、心理臨床相談室と子育てステーション世田谷発達相談室(以下、発達相談室)の二つの相談室を開室している。心理臨床相談室は、臨床心理士養成指定大学院の第1種指定校としての内部実習機関と位置付けられている。大学院生が当研究所スタッフの指導を受けながら、地域の幼児から成人までを対象にカウンセリングやアセスメントなどを行っており、学校不応答や職場ストレスなどの様々な主訴の背景に発達障害の可能性が疑われる相談を多く受理している。また、発達相談室は、世田谷区の発達障害者支援事業の一つであり、世田谷区から委託を受けた特定

非営利活動法人NPO昭和が当研究所内に月に3日開室し、世田谷区内在住の発達障害またはその疑いのある18歳未満の子どもとその家族を対象に、無料で発達相談を行っている。発達相談室では、アセスメントを中心とする相談業務と、家族支援として力を入れているペアレント・トレーニングの二つを柱とし(百瀬・越智・佐藤・松永・藤崎, 2014)、さらに発達障害または発達障害が疑われる思春期を対象としたスキルアップ・プログラム¹⁾を行っている。

発達障害とは、発達障害者支援法の定義によると「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するもの」とされている。発達障害のタイプによって少しずつ異なるが、認

知発達に偏りがあることにより、コミュニケーションの障害、対人関係・社会性の障害、不注意などの特性をもち、学校生活や社会生活に困難をかかえていることが多い。実際の心理支援の場面では、発達障害の診断を受けている人だけでなく、発達障害の診断基準は満たさないものの認知発達の偏りが認められるグレーゾーンの人々や、学習や生活に支障が生じているにもかかわらず未診断の人々に出会うことが多く、本稿ではそのような人々も含めて発達障害等としている。幼児期や児童期の相談では、中核症状とも言える特性への対応が中心となるが、思春期以降には、不適応体験の蓄積による自己肯定感の低下や、不登校・ひきこもりなどの二次障害と考えられる問題への対応が求められる。特に思春期は、進路選択や複雑化する友人関係に向き合う中で、自己の特性への気づきや受容という心理的負荷のかかる課題と直面せざるをえなくなることから、心理支援への期待が大きい。

しかし、思春期の発達障害等の子どもの心理支援の現場では、「ふつう」「べつに」と言った曖昧な返事しか返ってこない、雑談に流れやすいなど、かかわりの難しさに苦慮している。彼らは思春期特有の大人への抵抗に加え、自分自身が何にどう困っているかを捉えるのが苦手で、不安や葛藤の言語化が難しいため、知的発達に遅れがなくても対話によるカウンセリングが成り立ちにくい。この「自らが何をどう思っているか捉えるスキル」とは、「メタ認知能力」に相当する(独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構障害者職業総合センター, 2011)。メタ認知とは、自分自身の記憶や経験などの自己モニタリングであり、自分の体験に向き合って考えるカウンセリングやアンガーマネジメント等の心理支援において重視される認知機能である。また、米田(2011)は、アスペルガー障害の中核特性について“いろいろな側面から認識できることを、一面からしか見たり聞いたり感じたり覚えたりできないところに本質がある”(米田, 2011, p64)とした上で、多くのアスペルガー障害の人々に見られる周辺的特性の一つとして「自己モニター障害特性」を挙げている。このようなメタ認知や自己モニタリングが苦手であるという認知機能の個性が、心理支援を行う上での障壁(バリア)となりやすい。

近年、発達障害を含めて障害のある人々をめぐる社会情勢は大きく変化している。障害者権利条約²⁾が2014年1月に締結され、教育や雇用をはじめとする社会生活のあらゆる場面において、障害や何らかの困難を抱える人々に対する合理的配慮³⁾の提供が社会的責務となった。臨床心理士が行う心理支援においても、身体障害に対応した物理的な調整はもとより、自己モニタリングの苦手さが障壁(バリア)とならないよう、合理的配慮に基づく調整が要請されるものと考えられる。個々の状態に応じた合理的配慮の検討にあたっては、ICF(国際生活機能分類: International Classification of Functioning, Disability and Health)の活用が推奨されている(文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会, 2012)。ICFとは、2001年に世界保健機構(WHO)の総会で採択された“健康状態と健康関連状況を記述するための、統一的で標準的な言語と概念的枠組みを提供することを目的とする分類”(厚生労働省大臣官房統計情報部, 2007, p3)であり、Fig. 1に示す概念図で表される。ICFがそれ以前の考え方と大きく異なる特徴は、生活機能に影響を与えるものとして「環境因子」と「個人因子」という二つの「背景因子」を導入し、「環境因子」については物的環境だけでなく人的・制度的環境など非常に広く捉えているところにある(上田, 2005)。ICFを活用することで、当事者を含めた関係者が生活機能や疾病の状態についての共通理解を持つことができ、生活機能や疾病等に関するサービスの計画・評価等に役立てることができるとされている(厚生労働省大臣官房統計情報部, 2007)。

コミュニケーションや認知処理を補うためにツールを活用する試みは、ICFの採択以前から、AAC(拡大代替えコミュニケーション: Augmentative and Alternative Communication)として実践及び研究が行われてきた。AACには、指差しやジェスチャーによる「ノンテクノロジー技法」、簡単なテクノロジーを使う「ローテクノロジー技法」、そして、ICT(Information and Communication Technology)機器を活用する「ハイテクノロジー技法」があり、この3つの方法を組み合わせて最大限にコミュニケーションを引き出すことが大切である(中邑, 2014)とされている。近年は、ICTの著しい発展により、AACにおいてもハイテクノ

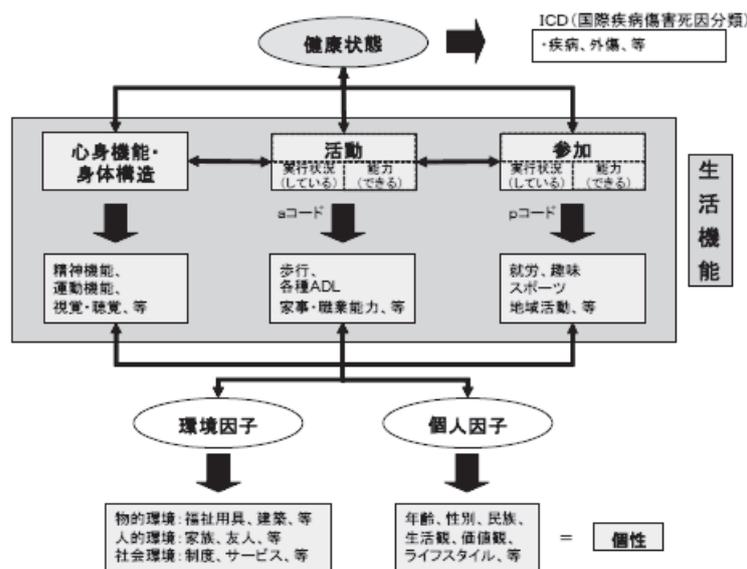


Fig. 1 ICF 概念図 (具体例が入ったもの) (厚生労働省大臣官房統計情報局、2007、p5)

ロジー技法が注目されている。中邑・近藤 (2012) は、ケータイやパソコン、タブレット端末など身の回りにあるテクノロジーを「アルテク」と呼び、発達障害の子どもの学習やコミュニケーションを助けるツールとして活用することを提唱するとともに、東京大学先端科学技術研究センター人間支援工学分野において、テクノロジー活用により困難を抱えた子どもたちの可能性を引き出す活動を展開している。また、教育分野においても、障害のある子どもが十分に教育を受けられるための合理的配慮及び環境整備として、教材や教育方法にICT機器の活用が取り上げられている (文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会、2012)。しかし、心理支援の領域においては、支援ツールとしてのICT活用はあまり意識されていない。

本稿では、ICTを活用した心理支援システム整備の一環として試みた発達障害等の思春期の子どものための心理支援プログラムを紹介し、実施者であるカウンセラー側の視点から分析し、ICFの観点をふまえて心理支援におけるICT活用の可能性を検討することを目的とする。

方法

当研究所では、合理的配慮に基づく心理支援を行うための環境整備に向け、本学平成27年度「教

育・研究に関するプロジェクト事業」として、「ICTを活用した心理支援システム整備」への取り組みを始めた。その一環としてタブレット端末を導入し、心理教育用コンテンツの作成及び心理支援ツールとしての活用方法の検討を進めている。

1. 機器の体制整備

導入した機器は、タブレット端末 (iPad air2) 2台、タブレット端末からワイヤレス接続可能なプリンタ1台である。小・中学生の利用者とともに使用することを想定し、タブレット端末には衝撃吸収保護カバー (子ども用) を使用している。また、タブレット端末は、本学の無線LANにより、インターネットに接続できる状態に設定した。将来的には小集団支援も想定し、専用接続ケーブル (HDMI) 及び接続アダプタ (Lightning Digital AVアダプタ) により、大型ディスプレイにも接続可能にした。

2. ソフトウェアの体制整備

(1) 心理教育用コンテンツの作成

思春期のクライアントを対象として、心理支援の意義や目的を視覚的にわかりやすく伝えるためのオリジナル心理教育教材『ティーンのための心のスキルアップ講座』 (Fig. 2) を作成した。これは、厚生労働省「うつ病の認知療法・認知行動療法マニュアル」 (厚生労働省、2009) をもとに、小・中学生にわかりやすい具体例を盛り込み、



Fig. 2 『ティーンのための心のスキルアップ講座』の一部

「出来事」と「考え」と「気分」の関係や、心理支援でどのようなことを行うかをタブレット端末で視覚的に提示するものである。

作成には、Keynote (iOSデバイス用のプレゼンテーション制作アプリケーション) を用いた。小学校高学年用は10スライド、中学生以上用は13スライドで構成した。

(2) 心理支援ツールとして有用なタブレット端末の機能やソフトウェアの検討

心理支援に活用しやすい機能及びソフトウェアについて、中邑ら (2012) 及びDo-IT JAPAN (東京大学先端科学技術研究センター人間支援工学分野, 2014) の取り組みを参考に情報を収集し整備した。

①アクセシビリティ機能

タブレット端末には、視覚・聴覚をはじめとするさまざまな困難のある人が使用するために便利な機能 (アクセシビリティ機能) が標準で備えられている。アクセシビリティ機能を使用することで、機器操作は一層容易になる。

文字入力操作がうまくできないクライアントを想定し、音声入力機能を使用できるよう設定した。

②インターネット検索機能

iPadの標準ブラウザであるSafariを設定した。これにより、部分的にしか記憶していないことや、視覚的記憶はあるにもかかわらず言語化できない内容について、思考や会話の流れを妨げることなくその場ですぐに情報を確認することを可能にした。

③思考マッピング作成アプリケーション「SimpleMind」 (販売元: xpt Software & Consulting B.V.)⁴⁾

「SimpleMind」とは、中央にテーマとなるキーワードを置き、それに関連する話題をつなげて思考マッピングを作成するアプリケーションである。話題と話題とを線でつなげることや、移動させること、色を変えること、画像を貼り付けることが簡単にできるのが特徴である。テーマに関連する情報や、連想すること、考えていることなどを視覚的に関連付けることができることから、思考の整理に役立つとされており、小学生にも操作が容易である。

話題になった出来事について思考マッピングにし、順序だてて振り返ることや、出来事に対する感情や考えを整理するツールとしてインストールした。

3. タブレット端末を活用したプログラムの実施概要

(1) プログラムのターゲット

自己モニタリングが苦手な思春期の発達障害等の子どもを対象とし、効果的な心理支援を検討する取り組みである。

今回の実施対象者 (以下、クライアント) は、心理臨床相談室または発達相談室を利用中の思春期の子ども3名 (小学校6年生男子2名、小学校6年生女子1名) であり、いずれも友人関係における孤立やトラブルを主訴としている。保護者をはじめとする関係者からは子ども本人への心理支援が期待される一方で、クライアントらは被害的・他責的に捉えがちであり、自分自身についての問題意識が薄い。彼らに対し、友人関係等の苦手な場面の体験について「考え」と「気分」とを意識し、自己モニタリングできるよう支援すること狙いとされた。

なお、クライアントの3名は、WISC-IVによ

り同年齢集団の平均域以上の知的発達水準であることが確認されており、3名のうち2名は発達障害の診断を受けている。本稿をまとめるにあたり、それぞれの保護者からは書面による同意を得た。

(2) プログラムの実施状況

それぞれのクライアントの発達課題やニーズに合わせ、プログラムの一部または全部を試行的に実施した。

本来はクライアント1名に対してカウンセラー1名で実施することを想定しているが、今回は試行的な実施であるため、子ども1名につき2名のカウンセラーが担当となってプログラムを実施した。2名のカウンセラーのうち1名が主にプログラムを進め、もう1名はタブレット端末の操作を補助した。プログラムの実施者となったカウンセラーは、臨床心理士2名、大学院生2名の計4名であった。

(3) プログラムの内容

1回50分の個別面接のセッションを2～4週間に1回の頻度で10回実施するプログラムである。導入期(第1回から第3回)、プログラム前期(第4回・第5回)、プログラム後期(第6回から第8回)、完結期(第9回・第10回)の全4期で構成されている。

導入期(第1回から第3回)：本プログラムの基本的な考え方を伝えるとともに、カウンセラーやタブレット端末に慣れることを目的とした。はじめに『ティーンのための心のスキルアップ講座』(Fig. 2)を用いてプログラムの基本的な考え方についての心理教育を行い、次いで自己紹介や短時間でできるゲームにより緊張を和らげ、カウンセラーとのラポール形成を行った。その上で、タブレット端末を用いて「相談室までどのような経路で来たか」など葛藤を伴わない日常的な話題について簡単な思考マッピングを作成し、色やつなぎ方を変えて楽しむなどのタブレット端末と思考マッピング作成の体験的な活動を行った。

プログラム前期(第4回・第5回)：クライアントが「考え」と「気分」を意識できるようになることを目的とした。楽しい出来事など日常生活で体験した葛藤の少ない体験についての思考マッピングを作成し、その思考マッピングの中から「考え」「気分」を探して色を変える作業をし、完

成後にその感想を話し合った。

プログラム後期(第6回から第8回)：怒りや不安などの否定的感情を伴う体験も含めて「考え」「気分」を意識できることを目的とした。はじめに、「感情」と「ストレス・マネージメント」についての心理教育を行った。「怒り」などの否定的感情については、イメージしやすいキャラクターを用い、誰にでもあるものであって、上手に付き合うことが学校生活や人間関係に役立つことを説明した。ストレス・マネージメントについては、クライアント個々の理解に応じた教材を用いて練習をした。そのような心理教育を経て、否定的感情を伴う出来事を思い出してもらい、思考マッピングを作成して体験を振り返った。

完結期(第9回・第10回)：出来事だけでなく自分自身について振り返ることを目的とした。クライアント自身をテーマとし、好きなこと、嫌いなこと、得意なことや性格などを表した思考マッピングを作成した。第8回までは、1セッションに1つの思考マッピングを作成していたが、第9回と第10回の2セッションを通し、1つの思考マッピングを作成した。

プログラムの実施結果と考察

カウンセラーがプログラム実施中のクライアントの行動を記録し、実施後のふりかえりにおいて気づいたことをまとめ、以下のように整理した。なお、各クライアントにより態度や行動が異なる場面もあったが、本報告では3名のクライアントに共通して見られた内容を抽出してまとめた。

1. 導入におけるタブレット端末活用のメリット

動機づけが低かったクライアントも、タブレット端末での作業の面白さに興味を示し、楽しんで取り組み始めることができた。タブレット端末の操作方法は、カウンセラーが行っているのを見て理解し、ほとんど教える必要がなかった。タブレット端末への文字入力、ローマ字入力、かな入力、フリック入力⁵⁾、音声入力などの複数の入力方式から、クライアント自身が自分の使いやすい入力方式を選択して入力することができた。

タブレット端末そのものが思春期のクライアントにとって魅力的で馴染みやすいアイテムであり、カウンセリングへの導入をスムーズにしてい

た。指先で直接触れて簡単に操作できるタブレット端末は、クライアントに機器使用への不安や抵抗を生じさせず、むしろ、容易に自分の体験や考えを文字化することができるという楽しさにより、主体的な取り組みを引き出すことにつながった。

2. カウンセラーとのかかわりにおけるタブレット端末活用のメリット

(1) 話題の共有しやすさ

カウンセラーとクライアントは、話題に出た内容を順次タブレット端末の画面上に文字化しながら話し合った。まず、カウンセラーがクライアントの発言を要約し、思考マッピングのどこに位置付くのかを確認した。その上で、カウンセラーまたはクライアントが、それをタブレット端末に入力して文字化していった。そして、クライアントは文字化された内容が自分の言いたいことと一致しているかを確認し、時にはクライアントが要約や思考マッピング上の位置付けを修正することもあった。

このようにクライアントの発言を一つずつ確認しながら文字化することで、カウンセラーの傾聴（繰り返し、明確化など）を音声情報だけでなく、文字情報としても伝えることができた。クライアントはそれを聴覚と視覚の両方で確認しながら、自分の体験とすり合わせるとともに、クライアントとカウンセラーとの間でもすり合わせができ、話題を共有しやすくなった。

(2) 会話の持続しやすさ

3名のクライアントのうち2名は、約45分間のセッションにおいて、話を逸らすことなく一つのテーマについて会話を続けることができた。通常この年齢では、45分間一つのテーマで会話を維持するのは難しく、ゲームや手芸などの作業も取り入れながらかかわることが多いが、タブレット端末の画面に表示された内容を視覚的に確認しながら話すことにより、話が逸れてもすぐに戻って会話を持続させることができた。他の1名も、タブレット端末を使用しない場合に比べ、会話の持続時間が伸びた。また、作成した思考マッピングを保存しておくことで、次のセッションにも同じテーマについて前回の続きから話すことができた。

このように会話が持続できることで、その話題に焦点を当てて内容を深めることができた。一回

のセッションの中では解決しきれない問題についても、継続して取り組める可能性が見えた。

(3) 考えを整理する時間としての「沈黙」

クライアントの視線はタブレット端末とカウンセラーとの間を行き来しており、話す内容を考えたり入力したりしている時には黙ってタブレット端末の画面を見つめ、それについて説明する時にはカウンセラーの顔を見ていた。

このようなタブレット端末上の思考マッピングを眺める時間や入力する時間は、クライアントが考えをまとめる時間としての「沈黙」になっていた。通常のカウンセリングにおける「沈黙」は扱いの難しい時間になりがちであるが、タブレット端末に向かう時間として、クライアントが考えを整理する時間が位置づけられ、カウンセラーもそれを見守ることができた。

3. クライアントに見られた変化

(1) 思考の広がり と 統合

クライアントは思いついた単語や気になった事柄をバラバラに羅列し (Fig. 3)、指で画面上の情報に触れて位置や色を変えることができる「SimpleMind」の機能を用いて、そのまとまりのない単語や話題をタブレット端末の画面上で構成し (Fig. 4)、話の筋道を確認しながら会話を進めた。さらに、タブレット端末に文字化された内容を手がかりに、関連するエピソードや類似のエピソード、そのエピソードに登場する人物の発言や行動など、様々な角度から話を広げていった。クライアントは派生的に話されたそれぞれの内容に

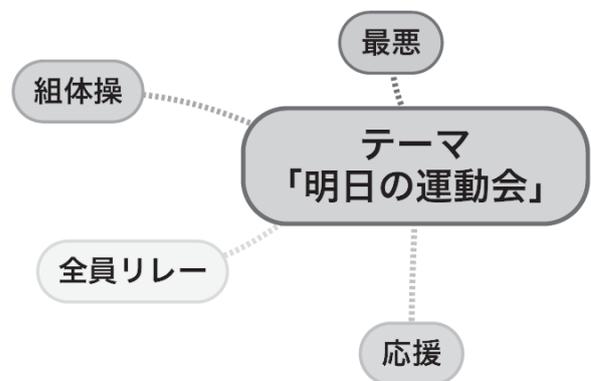


Fig. 3 思考マッピング①

思いついた単語や気になった事柄を羅列 (プログラム中に作成したものではなく、説明のために作成したイメージ)

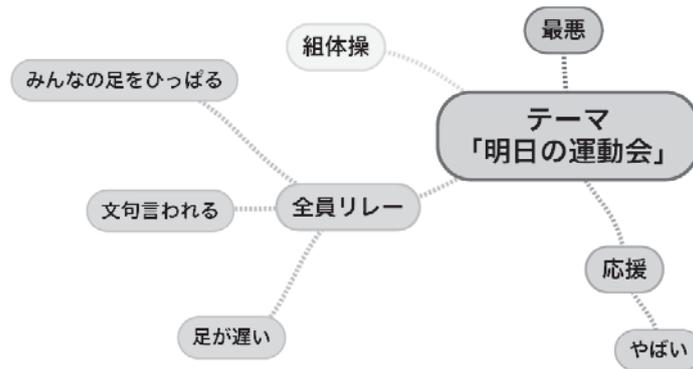


Fig. 4 思考マッピング② 単語や話題を画面上で構成
(プログラム中に作成したものではなく、説明のために作成したイメージ)

ついても、全体の思考マッピングの中に位置付けたまま、枝分かれしたところからの思考マッピングを展開させることができた (Fig. 5)。

このように、散発的にまとまりなく表現された内容であっても、タブレット端末上に視覚化することで、順序立て、関連付け、系統的に広げることができたとともに、多面的な内容を重層的につなげて統合することができた。

(2) 否定的感情への直面化

自分には「悩み」も「ストレス」も関係がないという姿勢を見せていたクライアントが、回を重ねるごとに、怒りや悲しみの体験についても、話題にすることができるようになった。タブレット端末上に文字化された内容については、否定的な感情などの扱いにくい事柄についても、カウンセ

ラーはそれを指差しながら容易に質問することができた。また、クライアントにも負荷がかかっている様子は見られず、楽しい話題や日常的な事柄と同様に話を進めることができた。

タブレット端末上に視覚化して外在化することで、問題と適度な距離を取って客観的に捉えやすくなり、葛藤をとまなう問題への直面化を容易にした。

(3) 自己モニタリングの体感

思考マッピングをある程度完成させたところで、クライアントは全体を眺め、自分が表現した内容を種類別に色分けをし、順序や位置関係を調整していた。クライアントは、そのような作業をしながら話題全体をふりかえり、自分が考えていたのはこういうことだったと、あらためて気づき

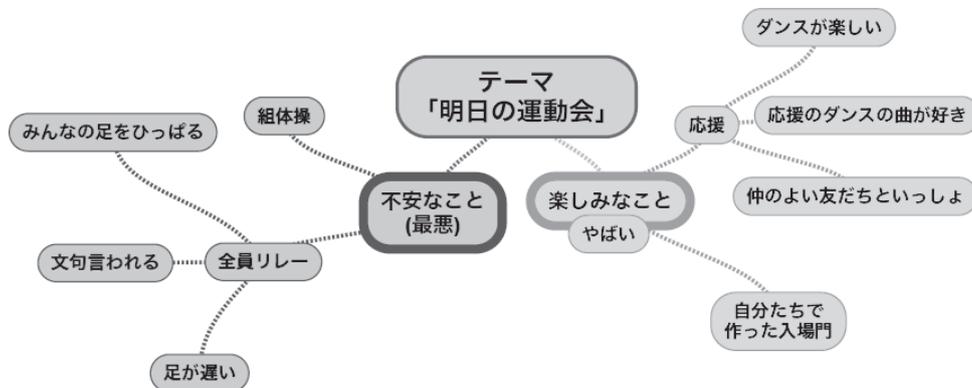


Fig. 5 思考マッピング③ 全体の中に位置づけ枝分かれさせて展開
(プログラム中に作成したものではなく、説明のために作成したイメージ)

納得していた。そして、回を重ねるにつれて、クライアント自身が自分の発言を要約し、タブレット端末上の思考マッピングのどこに位置付くかを自発的に考えながら話すようになった。

タブレット端末上の思考マッピングを手がかりとして、クライアントはそれまで部分的にしか焦点を当てることができなかった自分の体験や記憶の全体像について、俯瞰的・客観的にモニタリングする経験を体感できた。

(4) 日常への般化

自宅でもタブレット端末やスマートフォンが利用できる環境の事例では、プログラムの場で試みた思考マッピング作成を自宅でも実行し、日々の問題解決に役立てていた。タブレット端末を使って体験を振り返る経験は、日常生活にも般化させることが期待できる。

総合考察

1. タブレット端末を導入したプログラムについて

思春期の発達障害等の子どもたちを対象に、タブレット端末を活用したプログラムを作成し実施した。その結果、タブレット端末の活用は心理支援に次のような利点をもたらし、自己モニタリングが苦手な子どもたちに効果的な心理支援の可能性を広げることが確認できた。

- (1) タブレット端末そのものが思春期の子どもにとって魅力的であり、心理支援への抵抗感を軽減させる。
- (2) タブレット端末を間に置いて文字化しながら話し合うことで、話題を共有しやすくなるとともに、時間をかけて話し合うことができるなど、カウンセラーとのかかわりに効果的な影響をもたらす。
- (3) タブレット端末を活用することで、話題を系統的・多面的・重層的に広げつつ統合することや、自分の体験を客観的・俯瞰的にモニタリングすることなど、思春期の発達障害等の子どもが苦手とする認知処理を補うことができる。また、タブレット端末上に問題を外在化させることで、否定的感情を伴う内容についても話題にしやすくなり、今後クライアントが直面する様々な問題について心理支援の中で取り扱える可能性が見えた。

- (4) タブレット端末を用いて考えをまとめるスキルは、日常生活にも般化させることができる。

なお、本稿は実施者であるカウンセラーのみの視点からの報告であり、今後はクライアント側の視点やクライアントの状態とも関連付けた分析を行い、エビデンスを蓄積する必要がある。また、ICT活用にあたっての留意点や課題などについても検討を重ねていきたい。

2. ICFの視点から「ICTを活用した心理支援システム」を考える

今回の試みについて、ICF概念図 (Fig. 1) に沿って整理すると、Fig. 6のようなICF関連図に表すことができる。

「健康状態」に発達障害等の個性をもつ子どもには、「心身機能・身体構造」の特徴として、自己モニタリングが不得手であったり、コミュニケーションが未熟であったり、不注意や衝動性などの傾向が見られやすい。そのため、心理支援という「活動」を行う際にも、散発的でまとまりのない会話に流れやすく、否定的感情を伴う問題に向き合って解決策を模索することが難しい。また、「個人因子」に思春期特有の心理的負荷や、大人からの支援への抵抗感が加わることで、心理支援を効果的に行うことが非常に難しくなる。

しかし、そこにタブレット端末活用という「環境因子」を加えることで、カウンセラーと話題を共有し時間をかけて話し合う「活動」や、否定的感情を伴うものも含めて自分の体験について思考し客観的に振り返るなどの「活動」が容易になり、心理支援という「活動」を効果的に行うことができる。そして、効果的な心理支援は、弱い認知機能の発達を促すことにつながるという意味で「心身機能」に、学校生活や社会生活への適応につながるという意味で「参加」にも影響を及ぼす可能性がある。

さらに、タブレット端末の活用は、自己モニタリングが苦手であることや支援者である大人への抵抗感といった障壁(バリア)を取り払うという意味で、心理支援場面のバリアフリー化であり、「環境因子」を変える合理的配慮であると言える。ICTが進化し続ける昨今、そのようなICTを味方とし、発達障害等の人々を含めた全ての人々にとって有効となる心理支援のユニバーサルデザ

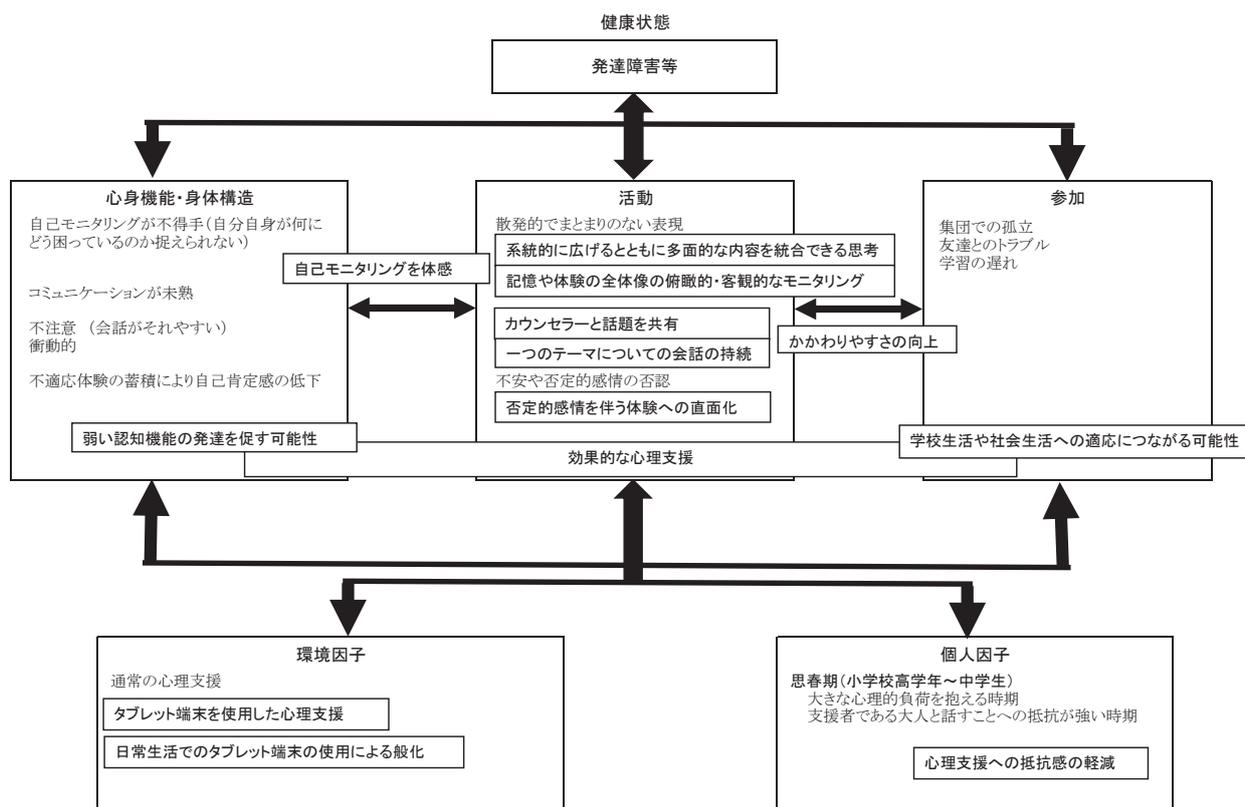


Fig. 6 ICF関連図

イン化に向けた選択肢の一つとして、今後も検討を続けたい。

謝辞

当研究所をご利用いただき、本論文をまとめるにあたりましては、早く承諾してくださいました皆様に心より感謝申し上げます。

注

- 1) 思春期を対象として、個別の認知特性とニーズに合わせ、認知行動療法やアサーションなどを組み合わせ、子ども一人につき10回の個別面接を行っている。
- 2) 障害者権利条約：障害者の権利に関する条約 (Convention on the rights of persons with disabilities)
- 3) 合理的配慮：障害者権利条約第2条に「障害者が他の者との平等を基礎として全ての人権及び基本的自由を享有し、又は行使すること

を確保するための必要かつ適当な変更及び調整であって、特定の場合において必要とされるものであり、かつ、均衡を失した又は過度の負担を課さないものをいう」と定義されている。

- 4) <https://itunes.apple.com/jp/app/simplemind+-maindomappu/id305727658?mt=8>
- 5) フリック入力：スマートフォンなどタッチパネルで使用される日本語文字入力方式の一つ。

引用文献

独立行政法人 高齢・障害者雇用支援機構 障害者職業総合センター (2011). 資料シリーズ No.59 認知に障害のある障害者の自己理解促進のための支援技法に関する研究 2011年3月
 (http://www.nivr.jeed.or.jp/download/shiryou/shiryou59.pdf) (2015年12月10日)

厚生労働省大臣官房統計情報部 (2007). 生活機

- 能分類の活用に向けて(案) — ICF (国際生活機能分類) : 活動と参加の評価点基準 (暫定案) — 2007年3月 (<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/03/dl/s0327-51-01.pdf>) (2015年12月10日)
- 厚生労働省 (2009). 「うつ病の認知療法・認知行動療法マニュアル」(平成21年度厚生労働省こころの健康科学研究事業「精神療法の実施方法と有効性に関する研究」)
(<http://www.mhlw.go.jp/bunya/shougaihoken/kokoro/dl/04.pdf>) (2015年12月10日)
- 中邑賢龍 (2014). AAC入門—コミュニケーションに困難を抱える人とのコミュニケーション技法— こころリソースブック出版会
- 中邑賢龍・近藤武夫 (2012). 発達障害の子を育てる本 ケータイ・パソコン活用編 講談社
- 百瀬 良・越智眞理子・佐藤昌子・松永しのぶ
藤崎春代 (2014). 地域の発達障害児支援事業における発達相談室の役割—個別発達相談およびペアレント・トレーニングの検討—
昭和女子大学生生活心理研究所紀要, 16, 81-93.
- 文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会特別支援教育の在り方に関する特別委員会 (2012). 「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進 (報告)」平成24年7月23日
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321669.htm) (2015年12月10日)
- 東京大学先端科学技術研究センター人間支援工学分野 (2014). Do-IT JAPAN 2014レポート
(http://doit-japan.org/doit/app/webroot/files/uploads/DO-IT_Japan_2014_Report.pdf) (2015年12月10日)
- 上田 敏 (2005). ICF (国際生活機能分類) の理解と活用—一人が「生きること」「生きることの困難(障害)」をどうとらえるか きょうされん
- 米田衆介 (2011). アスペルガーの人はなぜ生きづらいのか? 大人の発達障害を考える 講談社

さとう あきこ (昭和女子大学生生活心理研究所・NPO昭和 子育てステーション世田谷発達相談室
東京大学先端科学技術研究センター人間支援工学分野)

ますぶち ゆうこ (昭和女子大学生生活心理研究所・NPO昭和 子育てステーション世田谷発達相談室)

かまた せりあ (昭和女子大学生生活心理研究所・NPO昭和 子育てステーション世田谷発達相談室)

たなか なおこ (昭和女子大学生生活心理研究所・NPO昭和 子育てステーション世田谷発達相談室)